

目的 着物は布地の直線を、直線のまま裁って、直線に縫う。それを人間の身体の曲線に合わせて着るため、着る方の着：なしもまたむっかしいものがある。身体に合った着方を考えた場合、体格の個人差に影響することはいうまでもないが、標準寸法で仕立てあげればほとんどの人が着用できる。前報では衿肩明のあけ方の違いを報告したが、その中の2種類ととりあげて、身頃の社下りの位置の縫代を変えた場合について比較検討した。

方法 衿肩明を繰越し分だけずらせて直線にあける方法と、肩山にあけてから繰越し分曲線にあける方法との2種類を用いて、社下りの位置で衿肩明より $-0.5\text{cm}$ 、 $-1.5\text{cm}$ 、 $-3\text{cm}$ の差をつけた場合の上半身実物製作したものをボディに着せて比較した。着装条件は背中心における頸と衿の上端との離れ寸法を $2.5\text{cm}$ 、 $6\text{cm}$ とした場合、前打合わせはボディの頸の前中心より $3.5\text{cm}$ 、 $6\text{cm}$ 下った場合の組合せとした。測定箇所は(1)着物の肩山の衿付点とボディの肩山との離れ寸法、(2)ボディの肩山における頸と衿付の離れ寸法、(3)ボディの後中心点と後衿付点との離れ寸法、(4)背中心における衿の開角度、(5)身頃の衿付位置に出るしわの量を測定した。

結果 (1)、(2)、(3)、(4)ともに前中心の打合わせの位置が違ってても大差はなく、背中心の頸と衿の上端の端れ寸法が影響する。(1)、(2)、(3)とも $6\text{cm}$ 離れた方が大きな値を示すが、(4)の開角度は小さくなる。(5)のしわの量は社下りの位置で衿肩明よりも $3\text{cm}$ 差をつけたものが一番少なくなり、次いで $1.5\text{cm}$ 、 $0.5\text{cm}$ の順に多くなった。